

Title	西暦9・10世紀のアラビア語地理文献について：人文地理を中心に（2）
Author(s)	竹田，新
Citation	大阪外国語大学論集. 28 p.173-p.192
Issue Date	2003-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79908
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

西暦 9・10 世紀のアラビア語地理文献について —人文地理を中心に— (2)

竹 田 新

On Arabic Geographical Works in the 9th and 10th Centuries (2)

TAKEDA Shin

(1)

西暦 10 世紀に入ると、“人文”地理学¹⁾の分野においては、一方では Ibn al-Faqīh (290AH/903 年以後没) の *K. al-Buldān* 『国々』, al-Mas'ūdī (345/956 年没) の *K. Murūj adh-dhahab wa-ma'ādin al-jawhar* 『黄金の牧場と宝石の鉱山』や *K. at-Tanbīh wa-l-ishrāf* 『提言と再考』, Abū Zayd as-Sirāfī (304/916 年以後没) の *Akhbār as-Sin wa-l-Hind* 『中国・インド情報』補遺, Ibn Fadlān (310/922 年以後没) の al-Bulghār (ヴォルガ=ブルガール) 旅行記, Abū Dulaf (342/953 年以後没) のウイグル (或いはトルキスタンとインド) 旅行記, Buzurg b. Shahriyār (343/954 年以後没) の *K. 'Ajā' ib al-Hind* 『インドの諸奇事』, Ibn Sulaym al-Uswānī (365/975 年以後没) の *K. Akhbār an-Nūba wa-l-Maḡurra wa-'Alwa wa-l-Buja wa-'n-Nīl* 『ヌビアとマクッラとアルワとベジャとナイルとの情報』といった「国々の奇事の学」に属する作品が世界各地の多彩な記述を提供する。その他, 作者未詳の 'ajā' ib (奇事) 書 (通称, *K. Mukhtasar al-'ajā' ib* 『諸奇事の要約』) もこの世紀の作品かも知れない。

そして、もう一方では al-Balkhī (322/934 年没) の *K. Suwar al-aqālīm* 『諸州の姿』, Qudāma (337/948 年没) の *K. al-Kharāj wa-sinā'at* (或いは *san'at*) *al-kitāba* 『租税と書記術』, al-Istakhri (350/961 年頃没) の *K. al-Masālik wa-l-mamālik* 『諸道と諸国』, Ibn Hawqal (380/990 年頃没) の *K. Sūrat al-ard* 『大地の姿』, al-Muhallabī (380/990 年没) の *K. al-Masālik wa-l-mamālik*, al-Muqaddasī (380/990 年以後没) の *K. Ahsan at-taqāsīm fī ma'rīfat al-aqālīm* 『諸州の知識に関する最良の区分』といったイスラーム圏の地誌記述を中心とした「諸道と諸国の学」に属する書が著され、この地誌的地理学は黄金期を迎える。

また、「諸道と諸国の学」だけでなく「国々の奇事の学」にも属する書として Ibn Rustih (310/922 年以後没) の *K. al-A'lāq an-naḡsa* 『貴重品』, al-Jayhānī (313/925 年以後没) の *K. al-Masālik wa-l-mamālik*, Mutahhar al-Maqdisī (355/966 年以後没) の *K. al-Bad' wa-t-ta'rikh* 『創始と歴史』などがある。その他, al-Hamdānī (334/945 年没) の *K. Sifat jazīrat al-'Arab* 『アラビア半島の特質』, Ahmad ar-Rāzī (344/955 年没) の al-Andalus (イベリア半島) 誌 (歴史書の一部か), 'Umar al-Kindī (357/968 年以後没) の *K. Fadā'il Misr* 『エジプトの長

所』といった一地方誌や, Ishâq b. al-Husayn (341/952 年以後没) の *K. Âkâm al-marjân fî dhikr al-madâ'in al-mashhûra fî* (或いは *bi-*) *kull makân* 『各地の有名な町々の叙述に関する珊瑚の丘』という世界地名辞典も現れる。更には「国々の奇事の学」と後述する「経度と緯度の学」の両要素を含む Ibn al-Qâss (335/946 年没) の *K. Dalâ'il al-qibla* 『キブラ (礼拝の方向) 案内』も登場する。

(2)

Ibn al-Faqîh の名で知られる Abû Bakr Ahmad b. Muhammad b. Ishâq b. Ibrâhîm は, al-Jibâl (メデア) の Hamadhân 出身 (彼は al-Hamadhânî と呼ばれる) のイラン系 adîb (文人) で, ハディース (聖伝承) にも精通していたようである。彼は 290/903 年頃, 5 巻に及ぶ地理書『国々』を著したらしい²⁾ が, 現在知られているものは, Abû'l-Hasan 'Alî b. Ja'far ash-Shayzarî の手になる要約 (413/1022 年) と, 後半部分に当たる, 一般に Mashhad (Meshed) 写本と言われる³⁾ 筆者不明の要約 (7 /13 世紀) である。

まず, ash-Shayzarî の要約では, 大地の創造, 海洋とその大地環囲, 海洋とその奇事, {as-Sîn (中国) の地と al-Hind (インド) の地との相違}; Makka (メッカ), at-Tâ'if, al-Madîna (メディナ), {Tihâma (アラビア半島西部海岸地域) と al-Hijâz (半島西部) との相違}, al-Yamâma (半島中部), al-Bahrayn (半島東部), al-Yaman (イエメン); 真面目から巫山戯へ巫山戯から真面目への変化; 故郷からの遠離への賛美; Misr (エジプト) と an-Nîl (ナイル); al-Maghrib (北西アフリカだが, ここでは al-Andalus も含む); ash-Shâm (シリア), Bayt al-Maqdis (エルサレム), Dimashq (ダマスカス) 等; al-Jazîra (上メソポタミア); ar-Rûm (東ローマ); {建造物の賛美と非難}; al-'Irâq, al-Kûfa, {al-Khawarnaq}, al-Basra; Fâris, Kirmân, al-Jabal (= al-Jibâl), Qirmâsîn (ケルマンシャー), Hamadhân, {神が各地に特有とした品物}, Nihâwand, Isbahân, Qumm, ar-Rayy (レイ) と Dunbâwand (ダマーヴァンド), Qazwîn と Zanjân と Abhar, Âdharbayjân (アゼルバイジャン), Armîniya (アルメニア), Tabaristân, Khurâsân; という内容になっている⁴⁾。

次に, Mashhad 写本に拠る後半部分は, al-Kûfa, al-Basra, Wâsit, {an-Nabat (下メソポタミアのナバト人)}, 平安の都 Baghdâd, Surra man ra'â (サーマツラー), as-Sawâd (下メソポタミア) とその特質ほか, al-Ahwâz (フーゼスターン), Fâris, Kirmân, al-Jabal (= al-Jibâl), Qirmîsîn, 国々の建造物とその特色や奇事, Hamadhân, {神が各地に特有とした品物}, Nihâwand と Isbahân と Qumm, ar-Rayy と ad-Damâwand, Qazwîn と Abhar と Zanjân, Tabaristân, Khurâsân, at-Turk という項目の記述を含んでいる⁵⁾。

この書は前世紀の al-Jâhîz の *K. al-Buldân* 『国々』 (248/862 年) と同様, 或いは al-Jâhîz の書を模倣したと言った方がよいかも知れぬが⁶⁾, 各地の khasâ'is (特異な事柄)・'ajâ'ib (不思議な事柄・奇事) を中心に展開する地理書であり, 読者を楽しませることに意を注いでいる。それゆえ, 詩や寸話が随所に散りばめられており, adab (教養人文学) としての記事が上記 (真面目と巫山戯, 故郷からの遠離, 建造物の評価) のほかにも幾つか (ash-Shâm 住民と al-Basra 住民による葡萄と棗椰子の優劣をめぐる論争, al-Kûfa 住民と al-Basra 住民の自慢争い, 著作者の義務と良書の長所, 郷土愛など) 挿入されている。後述する al-

Muqaddasī はこうした adab 的要素の導入を地理書としては不適切な逸脱だと批判する⁷⁾が、地理書を adab の中に取り込んだことは評価すべきである。その他、目に付く特徴として al-Jāhiz の『国々』と同様、宗教上の中心アラビアが政治・文化上の中心 al-'Irāq より重視されている（ただし、記述は al-'Irāq の方がアラビア半島より詳しい）ことが挙げられる。Ibn al-Faqīh の『国々』はその後、al-Mas'ūdī・al-Muqaddasī の各前掲書、[al-Bakrī (487/1094 年没) の *K. al-Masālik wa-l-mamālik* 『諸道と諸国』], Yāqūt (626/1229 年没) の *K. Mu'jam al-buldān* 『国々の辞典』, Sibṭ b. al-Jawzī (654/1256 年没) の *K. Mir'āt az-zamān fi ta'rīkh al-a'yān* 『名士たちの歴史に関する時代の鏡』, Ibn al-'Adīm (660/1262 年没) の *K. Bughyat at-talab fi ta'rīkh Halab* 『アレppo史研究の望ましいもの』, al-Qazwīnī (682/1283 年没) の *K. Āthār al-bilād wa-akhbār al-'ibād* 『諸国の古跡と信者の情報』(以下、『諸国の古跡』と略記)と *K. 'Ajā'ib al-makhlūqāt wa-gharā'ib al-mawjūdāt* 『被造物の諸奇事と存在物の諸珍事』, Abū 'l-Fidā' (732/1331 年没) の *K. Taqwīm al-buldān* 『国々の調査表』, Ibn ad-Dawādārī (741/1340 年没) の *K. Kanz ad-durar wa-jāmi' al-ghurar* 『真珠の宝庫と精粹の集成』などに利用・引用される。

al-Mas'ūdī すなわち預言者ムハンマドの教友 'Abd Allāh b. Mas'ūd の子孫たる Abū 'l-Hasan 'Alī b. al-Husayn b. 'Alī b. 'Abd Allāh は Baghdād に生まれ、若い頃 (303/915 年以前) から旅に出て、Khurāsān から Misr までの言わばイスラーム圏の中心部をはじめ、as-Sind (インダス川流域)、al-Lār (西デカン海岸)、az-Zanj (東アフリカ海岸と周辺地域) の Qanbalū (Pemba 島?) といった辺境・異境をも訪れ (インド洋とカスピ海は船行)、晩年は al-Fustāt (古カイロ) に住んだ百科全書家的 adīb で、シーア派的信仰を持っていたと言われていた⁸⁾。彼は地歴書だけでも 7 種を著したようである⁹⁾が、現在に伝わるのは 336/947 年脱稿の『黄金の牧場と宝石の鉱山』と、345/956 年脱稿の『提言と再考』と言ってよい。

『黄金の牧場と宝石の鉱山』は、30 篇に及ぶと言われる¹⁰⁾ 主著 *K. Akhbār az-zamān wa-man abāda-hu 'l-hidhān min al-umam al-mādiya wa-l-ajyāl al-khāliya wa-l-mamālik ad-dāthira* 『時代と、時の中に消え去った過去の民やいにしえの世代や消えた国々との情報』(通称 *K. Akhbār az-zamān* 『時代の情報』) の要約と考えられ、宇宙創造時からアッパース朝第 23 代カリフ al-Mutī' の治世 (334 ~ 63/946 ~ 74 年) までの対象とした 132 章からなる。そのうち第 7 章が al-Hind の諸事情、第 8 章が大地と海洋と天体など、第 9 章が河川、第 10 章が Habasha 海 (インド洋)、第 11 章が潮汐、第 12 章が Rūm 海 (地中海)、第 13 章が Buntus の海・Maytus の海・al-Qustantīniya の湾 (黒海とマルマラ海)、第 14 章が al-Bāb wa-l-abwāb・al-Khazar・Jurjān の海 (カスピ海) と諸海の順序など、第 15 章が as-Sīn の諸事情など、第 16 章が諸海 (実際はインド洋東部) や al-Andalus など、第 17 章が al-Qabkh (カフカス) の山と al-Khazar や ar-Rūs など、第 31 章が Misr と an-Nīl などの諸事情、第 32 章が al-Iskandariya (アレクサンドリア) の諸事情、第 33 章が as-Sūdān (サハラ以南) と az-Zanj ほか、第 34 章が as-Saqāliba (スラブ)、第 35 章が al-Ifranja (フランク) と al-Jalāliqa (ガリシア)、第 36 章が an-Nawkubard (ロムバルド)、第 40 章が諸国の特質、第 62 章が東西南北ほかや諸国の距離、第 63 ~ 第 68 章は諸民族の聖館を扱い、部分的には、第 29 章 al-Qustantīniya

(コンスタンティノーブル) 諸王) 中の al-Qustantīniya をはじめ、多くの章に地理的記述が見られる¹¹⁾。

この作品では地理が言わば歴史の序文のように扱われており、彼の地理と歴史とを分けない、或いは地理を歴史の一部と考える姿勢が窺われる。以後の歴史書にしばしば見られる、序論の一部として地理に言及する、或いは本論自体に地理を挿入するスタイルの先駆的作品である。そして、アッバース朝帝国内の道路・地方誌には殆ど触れず、al-Hind や as-Sīn ほか (イスラーム前のアラブも含む) の人々と宗教をはじめとする、異境の珍しい情報に重きを置いており、後述する「諸道と諸国の学」の代表 Balkhī 学派の作品とは際立った対照を見せる、「国々の奇事の学」の典型的な作品と言えよう¹²⁾。以後、『黄金の牧場と宝石の鉱山』の地理部分は異境のほか Misr などの記述も含めて、al-Bakrī の前掲書、az-Zuhri (549/1154 年没) の *K. al-Jughrāfiya* 『地理』、al-Idrīsī (560/1165 年没) の *K. Nuzhat al-mushtāq fī ikhtirāq al-āfāq* 『諸国踏破を熱望する者の楽しみ』、著者不詳の *K. al-Istibṣār fī 'ajā'ib al-amsār* 『諸都市の奇事の熟考』 (587/1191 年著)、Yāqūt · Sibṭ b. al-Jawzī · Ibn al-'Adīm の各前掲書、al-Qazwīnī の『諸国の古跡』、Ibn Sa'id (673/1274 年没) の *K. al-Jughrāfiyā fī 'l-aqālim as-sab'a* 『7 気候帯に関する地理』、Ibn Shaddād (684/1285 年没) の *K. al-'Alāq al-khatira fī dhikr umarā' ash-Sha'm wa-'l-Jazīra* 『シリアとジャズィーラの君主たちに関する極めて貴重な記述』、Ibn al-Mujāwir (690/1291 年頃没) の *K. Sifat bilād al-Yaman wa-Makka wa-ba'd al-Hijāz* 『イエメンの地とメッカと、ヒジャーズの一部との特質』、al-Watwāt (718/1318 年没) の *K. Mabāhij al-fikr wa-manāhij al-'ibar* 『思考の喜悦と考慮の方法』、ad-Dimashqī (727/1327 年没) の *K. Nukhbat ad-dahr fī 'ajā'ib al-barr wa-'l-bahr* 『陸と海との諸奇事に関する時代の精髓』、an-Nuwayrī (732/1332 年没) の *K. Nihāyat al-arab fī funūn al-adab* 『人文学諸分野における必要の限度』、Ibn ad-Dawādārī の前掲書、Ibn Khaldūn (808/1406 年没) の *K. al-'Ibar* …『実例の書』、al-Qalqashandī (821/1418 年没) の *K. Subh al-a'shā fī sinā'at al-inshā'* 『作文術における夜盲の朝』、al-Maqrīzī (845/1442 年没) の *K. al-Mawā'iz wa-'l-i'tibār fī dhikr al-khitat wa-'l-āthār* 『新地と旧跡との陳述における警告と考慮』、Ibn al-Wardī (861/1457 年没) の *K. Kharīdat al-'ajā'ib wa-farīdat al-gharā'ib* 『諸奇事の生真珠と諸珍事の貴真珠』、Ibn ash-Shihna (890/1485 年没) の *Halab* (アレppo) 史、al-Himyarī (900/1494 年没) の *K. ar-Rawḍ al-mī'tār fī khabar al-aqtār* 『国々の情報に関する香しい庭園』、Ibn Iyās (930/1523 年頃没) の *K. Badā'ī az-zuhūr fī waqā'ī' ad-duhūr* 『時代の出来事に関する新奇な花々』、al-Manūfī (931/1524 年没) の *K. al-Fayḍ al-madīd fī akhbār an-Nīl as-sa'id* 『幸福なナイルの情報に関する長期の洪水』などに利用・引用される。

また、al-Mas'ūdī の全地歴書の総括・補遺と考えられる『提言と再考』は、全体が 83 章からなり、地理に関しては第 5 章が大地とその形状、第 6 章が 7 iqlīm、第 7 章が 7 iqlīm の 7 星分配、第 8 章が第 4 iqlīm、第 9 章が海洋とその数、第 10 章が Habasha 海、第 11 章が Rūm 海、第 12 章が Khazar 海、第 13 章が Buntus の海 (黒海)、第 14 章が周海を扱い、その他にも、前後の第 2 章が天体、第 3 章が季節、第 4 章が風、第 15 章が過去の 7 民族を扱う¹³⁾。

『黄金の牧場と宝石の鉱山』(以下、『黄金の牧場』と略記)に比べると、より学術書に近い記述内容を持っており、地理関係では諸国別の情報が省かれ、代わりに7 iqlīm, 特に第4 iqlīmの記述に力が入れている。なお、al-Mas'ūdīのiqlīmはギリシア起源の「“気候帯”」よりもペルシアのkeshvarつまり円状の「国」の意の方が強い¹⁴⁾。また、Ptolemaeus(168年頃没)の地理書・天文書のほかにMarinus(130年頃没)の地理書(いずれも翻訳?)もあったこと、アッバース朝第7代カリフal-Ma'mūnの治世(198～218/813～33年)にSūrat al-Ma'mūn「マームーン図」と呼ばれる世界地図が作製されたことが『提言と再考』には記されている。この書はその後、al-Bakrī・az-Zuhri・al-Maqrīzīの各前掲書に利用されるが、その他の書への影響はよく分らない。

Abū Zayd as-Sīrāfi, すなわちFārisのSīrāf出身のMuhammad b. Yazīd(或いはal-Hasan)は、当地の支配者Mazyadの甥と考えられ、東方への旅人・船乗りと交わり、303/915-16年には、移り住んでいたal-Basraで上述のal-Mas'ūdīとも会っている¹⁵⁾ 豪商のようである。そしてその頃、彼は従来の『中国・インド情報』(237/851年)に自分が集めた新情報を追記して、この書の補遺にしたと考えられる。

この補遺は大凡、as-Sīn, az-Zābaj(スマトラとジャワで、シュリーヴィジャヤ), 再度as-Sīnと麝香, al-HindとSarandīb(スリランカ), az-Zanjと龍涎香, 真珠の話からなり、これら各地の風習や事情を述べる¹⁶⁾。

著者は情報提供者の報告の中で確信を持てるものだけを記そうとしており、単なる'ajāibを越えて、正確さを追求した書と言えよう。Bānshū(黄巢)の乱, Ibn WahabのKhumdān(長安)訪問, MaharājaのQumār(クメール)遠征, Khānfū(広州)の宦官の不法に対するKhurāsān商人の反抗の記事など、この補遺は中国およびインド洋諸国の民俗・商業・政治・自然に関する貴重な情報を提供し、al-Mas'ūdīの『黄金の牧場』のほか、通称『諸奇事の要約』, al-Idrīsīの前掲書, al-Qazwīnīの『諸国の古跡』などに利用・引用される。

Ibn Fadlān, すなわちAhmad b. Fadlān b. al-'Abbās b. Rāshid b. Hammādは、309～10/921～22年にアッバース朝のカリフal-Muqtadir(第18代, 在位295～320/908～32年)がal-Bulghārの王の許に派遣した使節の一員であり、Baghdādに帰還後、その旅行のrisāla『報告』を著した。

この報告書は序言, al-'Ajām(ペルシア)【平安の都BaghdādからBukhārā・Khuwārazm(ホラズム)・al-Jurjāniya(グルガンジュ)まで】とal-Atrāk(トルコ系諸部族)【al-Ghuzzīya(オグズ)・al-Bajanāk(ベチェネグ)・al-Bāshghird(バシュコルト)】, as-Saqāliba(実はヴォルガ=ブルガール), ar-Rūsīya(ルース), al-Khazarからなり、これら各民族の生活・風習や自然環境を描く¹⁷⁾。

ブルガール王Almishによる国家統一の過程や、オグズ・ブルガール・ルースの各死者埋葬法の描写の他, Jayhūn(アム川)の凍結, オグズとイスラーム教徒との商業協定, バシュコルトの12神他の信仰(アニミズム), ブルガールのオーロラと白夜, ルースの商業神像の崇拜など、西暦10世紀の北方諸民族の社会・文化・自然の諸様相を伝える確かな記録で

ある。そして、この旅行記は al-Istakhrî の前掲書、{al-Mas'ûdî の『黄金の牧場』, Ibn Hawqal・Yâqût の各前掲書, al-Qazwînî の『諸国の古跡』, Ibn al-Wardî の前掲書などにも利用・引用され、イスラーム教徒が有する北方の地理的知識の一つの源泉となった。

Abû Dulaf の名で知られる Mis'ar b. al-Muhalhil al-Khazrajî は al-Hijâz の Yanbu' に生まれ、330/941 年頃 Khurâsân の Bukhârâ のサーマーン朝君主 Nasr b. Ahmad (第4代, 在位 301 ~ 31/914 ~ 43 年) の宮廷に身を寄せていた詩人であるが、331/943 年頃、偶々この地を訪れた as-Sîn (実は西ウイグル) の王 Qâlin b. ash-Shakhîr の使節に同行して、その王都まで赴き、Sijistân (スイースターン) に戻るまでの道中を記録に残したと伝えられる。そして、このウイグル (或いはトルキスタン・インド) 旅行記は、K. 'Ajâ'ib al-buldân『国々の諸奇事』と呼ばれていたのかも知れない¹⁸⁾。

Mashhad (Meshed) 写本と、Yâqût の前掲書や al-Qazwînî の『諸国の古跡』の引用によれば、往路の al-Atrâk [Bajā (ヤグマー?), Bajanâk, Jikil (チギル), Baghrâj (ブグラーチ?), Tubbat (ティベツト), Kîmâk (キメク), al-Ghuzz, at-Tughuzghuz (実はウイグル), Khirkhîz (キルギス), al-Kharluk (カルルク), Khutlukh ?, al-Khityân (キタイ), Bahî, al-Qulayb ? など] の地と終着地の王都 Sandâbil (甘州?), 及び復路の al-Hind [Kala (マレー半島のケダ?), Saymûr (チョール), Qashmîr, Mandûrafin ?, Kûlam (キーロン), Multân など] の様子を記したものらしい¹⁹⁾。

この旅行記は実際の部分と想像の部分とが混ざり合い、彼の旅行 (殊に帰路) に疑問が持たれているが、中央アジアのトルコ系諸部族の食物・宗教ほかの生活・風習の記事など、かなり細かな情報を提供する。そしてトルキスタンの記事は、仮に彼自身の情報でなかった場合でも、当時イスラーム教徒がこの地域の広範囲にわたってかなりの知識を有していたことを少なくとも立証する。なお、この書の後世への影響は Yâqût と al-Qazwînî の書以外には、al-Bâkûwî (816/1413 年以後没) の K. *Talkhîs al-âthâr wa-'ajâ'ib al-malik al-qahhâr*『古跡と強王の奇事との精髓』, Ibn Iyâs の K. *Nashq al-azhâr fî 'ajâ'ib al-aqtâr*『国々の奇事に関する花々の香り』などが挙げられる。

また、Abû Dulaf にはイラン旅行記もあり、Mashhad 写本によると、340 ~ 41/951 ~ 53 年頃、〈al-Jibâl の〉ash-Shîz から、北方の Bâkûya (バクー) や Tiflis, Âdharbayjân と Armîniya を巡り、その後、南下して 〈al-Jibâl の〉Shahrazûr や 〈al-'Irâq の〉Khâniqân を訪れ、今度は東進し、〈al-Jibâl の〉Qirmîsîn (Qirmâsîn) や Hamadhân, Nihâwand, ar-Rayy, Dunbâwand と Tabaristân, 〈Qûmis の〉Bistâm, Jurjân (グルガーン) などを経て、Khurâsân の Tûs に至り、そこから引き帰して Naysâbûr (ニーシャープール), Isfahân, al-Ahwâz の Sûq al-Ahwâz や Dawraq など巡ったようであり、これら各地の鉱物、遺跡、伝説、水資源、特産物ほかを記している²⁰⁾。

この方は前者のトルキスタン・インド旅行記よりは信頼が置けると考えられ、やはり上記の Yâqût と al-Qazwînî の両前掲書に利用・引用されている。

Buzurg b. Shahriyâr は Khûzistân の Râmhurmuz 出身のイラン系 nâkhudhâ (船主) であり、インド洋で活躍する船乗りたちから Fâris の Sîrâf や al-'Irâq の al-Basra ほかにおいて聞

いた奇談を集めて、342/953 年以降、2 巻本と考えられる『インドの諸奇事』を著した。その後、367/977-78 年以降に手を加えたようである²¹⁾。

初稿本に基づく van der Lith 版は 136 話を収めており、その内容は al-Hind・Sarandīb・al-Wāqwāq (ここではマダガスカル島?)・az-Zanj・as-Sin・az-Zābaj など、つまりインド洋・シナ海の沿岸と島々の珍しい動物や、これら各地の奇習、そして船乗りたちの冒険の記述である²²⁾。

前述の『中国・インド情報』補遺よりは真実性において劣るが、al-Wāqwāq 住民の Qanbaluh (= Qanbalū) 襲撃と Sufāla (モザンビーク南部) の一部占拠や、奴隷にされた az-Zanj 王のイスラームへの改宗と故国への帰還、Qashmīr 王のイスラームへの密かな改宗の話などユニークな記事を含む。また、女護が島や巨大な rukhkh 鳥、奇妙な猿の話などは『千夜一夜物語』のスインドバードの航海談とも一脈通じ、或いはその原型をなすものではないかとも言われている²³⁾。そして最近、この『インドの諸奇事』はその改訂本が al-'Umarī (749/1349 年没) の *K. Masālik al-absār fī mamālik al-amsār*『大都市を持つ諸王国についての洞察の道筋』に収録されていることが明らかになった²⁴⁾ が、その他の後世の書物への影響は不明である²⁵⁾。

Ibn Sulaym al-Uswānī, すなわち as-Sa'id (上エジプト) の Uswān (アスワン) 出身の Abū Muhammad 'Abd Allāh b. Ahmad は、362/973 年以前にファーティマ朝の将軍 Jawhar as-Siqillī (381/991 年没) により an-Nūba (ヌビア) のキリスト教王国に派遣された dā'i (宣教師)・使節である。王をイスラームに改宗させることは出来なかったが、an-Nūba 南部にまで足を踏み入れ、al-Qāhira (カイロ) に帰還後、カリフ al-'Azīz (ファーティマ朝第 5 代、在位 365 ~ 86/975 ~ 96 年) のために、『ヌビアとマクッラとアルワとベジャとナイルとの情報』(或いは *K. Akhbār an-Nūba*『ヌビア情報』) を著したと伝えられる²⁶⁾。

現存しないこの書は、al-Maqrīzī と al-Manūfī の各前掲書の引用に従えば、an-Nīl に沿って an-Nūba 各地を描写したものであり、北から Marīs【北端 al-Qasr, 首都 Bakhurās, 上 Maqs·Saqlūdhā 両地方, 南端 Bastū】, Maqurra【Baqūn 地方など, 首都 Dunqula】, 'Alwa【北端 al-Abwāb, 首都 Sūba】と an-Nīl 支流【東流 (アトバラ川), 白い an-Nīl, 緑の an-Nīl (青ナイル), 氾濫など】を記述し、al-Buja (ベジャ) にも言及している²⁷⁾。

彼の優れたフィールド・ワークの産物であり、ヌビアの、少なくとも西暦 10 世紀のそれに関する貴重な資料 (ヌビアの 3 キリスト教国の存在など) を提供し、アラビア語文献ではこれ以上に詳しく正確なヌビアとナイル上流の記述は知られていない。この書は al-Maqrīzī・al-Manūfī の各前掲書のほか、Ibn Iyās の『国々の奇事に関する花々の香り』などにも利用・引用される²⁸⁾。

また、al-Mas'ūdī の作品との関連性がある 'ajā'ib 書、通称『諸奇事の要約』は、世界全体 (アラブを中心とする人類史) を扱う第 1 部と Misr だけ (エジプト列王史) を扱う第 2 部とからなり、地理関係では、第 1 部中に、大地とそこにある物事、周海とそこにある諸奇事【Tinnīs (エジプトの) の情報、緑の海 (ここでは外海) にある島々、Sīdūn 島 (不明) ほか、東と as-Sin との海 (シナ海) の島々、Harkand の海 (ベンガル湾) の島々や as-Sin

の地, 'Umân や al-Yaman の海 (アラビア海) にある島々, 西の地の島々], 更には, 〈Nûh (ノア) の息子 Hâm (ハム) の子供たちの記述の中で〉, 黒人の Ghâna や an-Nûba や az-Zanj ほかの国々, {al-Hind や as-Sind, al-Barbar (ベルベル) など}, 〈Nûh の息子 Yâfith (ヤベテ) の子供たちの記述の中で〉, Yâjûj (ゴグ) と Mâjûj (マゴグ), as-Saqâliba, al-Yûnâniyûn (ギリシア人), as-Sîn, al-Ankubarda (= an-Nawkubard), al-Ifranj, al-Andalus, al-Burjân (ドナウ=ブルガール人), at-Turk, ar-Rûm, al-Furs (ペルシア人) と Khurâsân に関する記述などが含まれ, 第 2 部の中にも, Misr の諸奇事が含まれている²⁹⁾。

この書は, 882/1477 年の写本では al-Mas'ûdî 著の *Kitâb Akhbâr az-zamân wa-man abâda-hu 'l-hidhân wa-'ajâ'ib al-buldân wa-'l-ghâmir bi-'l-mâ' wa-'l-'umrân* 『時代と, 時の中に消え去った者との情報, そして, 国々と水中 (海) と建造物 (陸) との奇事』, 953/1546 年の写本では *Kitâb Mukhtasar al-'ajâ'ib wa-'l-gharâ'ib* 『諸奇事と諸珍事との要約』と呼ばれており, 後者の著者は従来, Ibrâhîm b. Wasîf Shâh とされてきた³⁰⁾。ところが最近, この書は al-Mas'ûdî が自著 *K. (Akhbâr az-zamân al-musammâ bi-) al-Awsat* 『中間の書』から抜き出した作品であり, この第 2 部は Ibrâhîm b. Wasîf Shâh ではなく, Ibn Wasîf as-Sâbi' (360/971 年頃没) によるエジプト関係の書を al-Mas'ûdî が引用したのだとする見解が出てきた³¹⁾。なお, 書名に関しては, この書の少なくとも第 1 部は『国々の諸奇事』とも呼ばれていたらしい³²⁾。いずれにしろ, この書の第 1 部中に見られる, 緑の海にある島々, 東と as-Sîn との海の島々, Harkand の海の島々に関する記述は, スインドバード航海談の記述と類似する箇所が多く, 前述の『インドの諸奇事』以上に『千夜一夜物語』とのつながりを感じさせる³³⁾。この作品は以後, al-Bakrî の『諸道と諸国』のほか, al-Maqrîzî の前掲書などにも引用・利用されたのではなかろうか³⁴⁾。

その他, al-Andalus の Turtûsha (トルトサ) のユダヤ教徒商人 (おそらく奴隷商) Abrahâm ben Ya'qûb すなわち Ibrâhîm b. Ya'qûb al-Isrâ'îlî at-Turtûshî が, 後ウマイヤ朝カリフ al-Hakam II al-Mustansir (第 9 代, 在位 350 ~ 66/961 ~ 76 年) のために? 著したヨーロッパ旅行の記録もあったらしい³⁵⁾。

{al-'Udhri (478/1085 年没) の *K. Nizâm al-marjân fî 'l-masâlik wa-'l-mamâlik* 『諸道と諸国に関する一連の真珠』} と al-Bakrî の前掲書や al-Qazwîni の『諸国の古跡』に拠ると, この商人は上述のカリフの使節団の一員として?, 大西洋に沿って, Burdhîl (Burdâl, ボルドー), Rudhûm (Rutûmâghus, ルーアン) を通り, Intriht (ユトレヒト) など北海沿岸に至り, そこからは内陸部へ向かい, Mughânja (Mayanssa, マインツ), Abûlda (フルダ) などに立ち寄り, 354/965 年 Mâdhî Burgh (マグデブルグ) で Hûtuh (オットー) 大帝に拝謁したようである。そこで大帝から中央ヨーロッパの情報を聞き, Ifrâgha (プラハ), Karâkwa (クラクフ), Asht (Auzburk, アウグスブルク) ほかを巡った後, Siqillîya (シチリア島) の Bânî wa-Arîsha (Trâbanish, トラパニ) などを経て戻ってきたようである。そして, 彼はこの時代のフランス王国と神聖ローマ帝国やポーランドほかのスラブ人諸国の実情を記したとされる³⁶⁾。

とりわけ, al-Bakrî が引用する西暦 10 世紀のいわゆるスラブ人の 4 王国に関する記述は

貴重なものと言われる³⁷⁾が、このユダヤ教徒商人の記録なるものは al-'Udhri と al-Bakri と al-Qazwîni の各前掲書のほか、Ibn Sa'id · Abû 'l-Fidâ' · ad-Dimashqî · al-Bâkûwî · al-Himyarî の各前掲書などにも引用・利用されている。

更には、al-Mas'ûdî の『提言と再考』や Ibn an-Nadîm (385/995 年没) の *K. al-Fihrist* 『目錄』が言及する Ibn Abî 'Awn al-Kâtib すなわち Abû Ishâq Ibrâhîm (或いは Muhammad) b. Ahmad b. an-Najm (322/934 年没) の *K. an-Nawâhî wa-'l-âfâq* 『諸地方と諸国』或いは *K. an-Nawâhî fî akhbâr al-buldân* 『国々の情報中の諸地方』も、国々の情報と陸海の多くの奇事を扱ったものらしい³⁸⁾。

(3)

al-Balkhî すなわち Khurâsân の Balkh 近郊に生まれた Abû Zayd Ahmad b. Sahl は、若い頃に al-'Irâq に遊学して既述 (前稿Ⅲ) の大学者 al-Kindî (260/874 年頃没) の弟子となり、長じて哲学や宗教諸学の大家として活躍し、サーマーン朝の書記官も務めた人物で、309/921 年頃、地理書『諸州の姿』(別名 *K. Ashkâl al-aqâlim* 『諸州の姿』, *K. Ashkâl al-bilâd* 『国の姿』, *K. Taqwîm al-buldân* 『国々の調査表』) を著したと伝えられる³⁹⁾。

この書は現在では不明であるが、al-Muqaddasî の言及に従えば、イスラーム帝国を 20 の iqlîm (ここでは、州の意) に分け、各 iqlîm を地図で表し、その地図に説明を付けた書のようなものである⁴⁰⁾。そこでこの al-Balkhî の書は、イスラーム世界だけを扱い、かつ明確な州区分を行ない、地図を配置するこの世紀の特徴的な地誌の原形とみなされ、この形態の地誌は、一般に彼の名をとって Balkhî 学派の地誌とも呼ばれる⁴¹⁾。そして、彼の地理書は al-Istakhri · [Ibn Hawqal] · al-Muqaddasî (以上、全て Balkhî 学派) の各前掲書は勿論、Yâqût · Ibn al-'Adîm · Ibn Shaddâd · ad-Dimashqî · an-Nuwayrî · al-Maqrîzî · Ibn al-Wardî · Ibn ash-Shihna の各前掲書などに利用・引用される。

なお、al-Balkhî の書が Abû Ja'far al-Khâzin (Abû Ja'far Muhammad b. al-Hasan al-Khurâsânî, 350/961 年以後没、サービア教徒の天文学者・数学者) の諸地図の説明に過ぎないと言う説もある⁴²⁾。

Qudâma すなわち Abû 'l-Faraj Qudâma b. Ja'far は、al-'Irâq の al-Basra のキリスト教徒 (アルメニア人?) の家に生まれ、早くからアッバース朝の官吏 (彼は al-Kâtib (書記官) と呼ばれる) となり、カリフ al-Muktafi (第 17 代、在位 289 ~ 95/902 ~ 08 年) の要請でイスラーム教徒に改宗して中央官庁の高い地位 (税務庁長官?) に就いた人物で、優れた adîb でもある。彼は 316/928 年頃、主著として『租税と書記術』という 8 部からなる行政百科を書き上げた⁴³⁾ が、現在に伝わるのは第 2 巻たる後半の 4 部だけである。

地理に関しては、第 5 部第 11 章が駅通庁、東方〈と西方〉への駅通路・街道【平安の都 (Baghdâd) から Makka · al-Yaman への道と各地からの Makka への道、平安の都から al-Ahwâz · Fâris · Isbahân · Kirmân · Sijistân への道、平安の都から他の東方: Hamadhân · Marw (メルヴ) · Samarqand · Farghâna (フェルガナ) などへの道、平安の都から Âdharbayjân · Armîniya への道、平安の都から西方: ar-Raqqa · Dimashq · al-Fustât · al-Qayrawân などへ

の道、平安の都から〈東南へ〉Istakhr・〈東北へ〉Mushkūya・〈北へ〉Bardha'aほか・〈西へ〉Jubb ar-Ramlまでの駅通路】、第6部第1章が大地の形態・体積・面積・位置・居住地、第6部第2章が大地の居住地域の区分【Sām（セム）とHāmとYāfithに3区分、al-Fursによる4区分、ar-Rûm人によるArûfā（ヨーロッパ）・Lûbiya（リビヤ）・大Āsiya（アジア）への3区分、“気候帯”による7区分】、第3章が居住地域の海洋の位置と海洋の距離と海洋の島々【大東海（インド洋）、ar-RûmとMisrの海（地中海）、Buntus（sic. Quntûs）の海、Jurjânの海（カスピ海）】、第4章が居住地域にある山岳【第1気候帯の前（南）～第7気候帯にある山岳の数および有名な山の名前と大きさ】、第5章が居住地域にある河川・泉・湿地【第1気候帯の前（南）～第7気候帯の後ろ（北）にあるそれらの数や有名な河川】、第6章がイスラーム帝国とその諸地方・税収高【as-Sawādの行政区分と税収高など、東方：al-Ahwâz・〈al-Jibāl〉以東と、西方：〈al-Jazīra〉以西・Ādharbayjânと、南方：〈al-'Arab〉の島（アラビア半島）との行政区分と税収高、再び諸地方の税収高】、第7章がイスラーム帝国諸国境とその周辺の民と山岳【ar-Rûmとの国境、ar-Rûmの軍制、at-Turkなど東北国境、南・西国境】を記述する⁴⁴⁾。

これら地理部分は前世紀のIbn Khurdādhbihの『諸道と諸国』（272/885年頃）と同様、行政の3大テーマすなわち道程・租税高・国境事情の記述（4方別、al-'Irāq中心）が主となっており、職業柄か、各地の租税高の記述はIbn Khurdādhbihの書のそれよりも詳しい。そして『租税と書記術』は、al-Mas'ūdīの『黄金の牧場』、Ibn Hawqal・al-Muqaddasī・[al-Muhallabī]・al-Idrīsī・Yāqūt・Sibt b. al-Jawzī・al-Watwāt・ad-Dimashqī・an-Nuwayrī・Ibn ad-Dawādārī・al-Maqrīzīの各前掲書などに利用・引用される。

al-Istakhrī、すなわちFārisのIstakhr出身とされるAbū Ishāq Ibrāhīm b. Muhammad al-Fārisīは、イラン系の人物で、少なくともal-'Arabの地（アラビア半島）・al-'Irāq以東、Mā warā' an-nahr（トランスオクシアナ）までのイスラーム圏を巡り歩き、340/951年頃『諸道と諸国』（別名*K. Masālik al-mamālik*『諸国の諸道』）を著した⁴⁵⁾。

この書は序章、al-'Arabの地、Fārisの海（ペルシア湾）、al-Maghrib（al-Andalusを包含）、Misr, ash-Sha'm, ar-Rûmの海、al-Jazīra, al-'Irāq, Khūzistān, Fāris, Kirmān, as-Sind, Armīniyaとar-RānとĀdharbayjān, al-Jibāl, ad-Daylam, al-Khazarの海、Khurāsānの沙漠（カヴィール・ルート両沙漠）、Sijistān, Khurāsān, Mā warā' an-nahr（Khuwārazmを包含）の21章からなり、各章に地図が付いており、内容は序章が世界の海洋と主な土地の紹介で、al-'Arabの地の章以下は、それぞれの境域、主な地方や都市、旅程などの記述となっており、故郷のFārisだけは、更に風土・住民・財源といった項目の説明もある⁴⁶⁾。al-Istakhrīの書は上述のal-Balkhīの書を骨格に、自らの旅行で集めた資料によって肉付けした作品と考えられるが、かなり体系的な地誌となっている。そして地図は、al-Balkhīに拠っているのだろう⁴⁷⁾が、経緯度に基づくものではなく、直線や円の多い半ば幾何的な図（一種の道案内図）となっている。これはサーサーン朝ペルシアの影響を受けたものと言われ⁴⁸⁾、後述のIbn Hawqal・al-Muqaddasīの各地図共々、既述（前稿Ⅲ）のal-Khuwārazmī（236/850年頃没）以来のPtolemaeus系統の経緯度を用いる地図と、イスラーム地図学を言わば2分する。ま

た、「州・地方」*iqḥīm*による居住地域の区分は、Ptolemaeus 系統の「“気候帯”」*iqḥīm*によるそれより、ペルシアの *kešvar* の影響を受けたとは言え、分かりやすいものであり、以後、「諸道と諸国の学」ではこの *iqḥīm* の方が多く用いられる（なお、「経度と緯度の学」は専ら「“気候帯”」*iqḥīm* を使う）⁴⁹⁾。al-Istakhrī の『諸道と諸国』はその後、特にペルシア語世界で評判を博する⁵⁰⁾ が、Ibn Hawqal と al-Muqaddasī の前掲書は勿論、al-Bakrī・Yāqūt・Ibn al-'Adīm の各前掲書、al-Qazwīnī の両前掲書、Abū 'l-Fidā' の前掲書などに利用・引用される。

Ibn Hawqal の名で知られる Abū 'l-Qāsim Muhammad b. 'Alī は、al-Jazīra の Nasībīn 出身（彼は an-Nasībī と呼ばれる）ではないかと考えられる⁵¹⁾ が、若い頃から地理学に関心を持ち、331/943 年に Baghdād を旅立って以来、商売をしながら、東は Mā warā' an-nahr から西は al-Maghrib・al-Andalus・Siqillīya までイスラーム圏のほぼ全域を巡り歩いた人物である。ファーティマ朝の Misr 訪問後、イスマール派の dā'i になったとも言われる⁵²⁾ が、諸国遍歴の途中、上述の al-Istakhrī に会い、その書の誤謬を直すよう頼まれたらしい⁵³⁾。その結果、Ibn Hawqal は 356/967 年以前に彼の『諸道と諸国』を脱稿し、Halab のハムダーン朝の君主 Sayf ad-Dawla（在位 333～56/945～67 年）に献じたと言われる⁵⁴⁾。その後、別人に献じるためか、367/977 年頃と 378/988 年頃の 2 度にわたり手を加えて、最終的には『大地の姿』という題名の作品を完成させたと考えられる。

Ibn Hawqal の『大地の姿』は、序章（+大地の姿）、al-'Arab の地、Fāris の海、al-Maghrib（+ al-Andalus + Siqillīya）、Misr、ash-Sha'm、ar-Rūm の海、al-Jazīra、al-'Irāq、Khūzistān、Fāris、Kirmān、as-Sind、Armīniya と Ādharbayjān と ar-Rān、al-Jibāl、ad-Daylam と Tabaristān、al-Khazar の海、Khurāsān と Fāris との沙漠、Sijistān、Khurāsān、Mā warā' an-nahr、結章からなり、結章を除く各章は地図が配され、序章は世界全体を紹介し、al-'Arab の地の章以下は、それぞれの境域と地図の説明に始まり、主な地方や都市、旅程、収税などを記述する⁵⁵⁾。

この書は一見すると、al-Istakhrī の書の記述をほぼ踏襲している印象が否めない。しかし、al-Maghrib・al-Andalus・Siqillīya の記述は殆どが独自なものであり、Misr、al-'Irāq、Mā warā' an-nahr などに関しても、自らの旅行と観察に基づいた記述は単なる修正を越えたものがあり、特に経済関係の記事にそれが多く見られる。また、地図もより詳しくなっている。そして、al-Istakhrī がアラビア語に多少の難があったこともあり、アラビア語世界では Ibn Hawqal の書の方がより評判を博し⁵⁶⁾、al-Muhallabī・[al-Muqaddasī]・al-Bakrī・al-Idrīsī・Yāqūt・Sibt b. al-Jawzī・Ibn Sa'īd・Ibn al-'Adīm の各前掲書、al-Qazwīnī の『諸国の古跡』、Ibn Shaddād・al-Watwāt・ad-Dimashqī・Abū 'l-Fidā'・an-Nuwayrī・Ibn ad-Dawādārī・al-'Umarī・Ibn Khaldūn の各前掲書、Ibn Duqmāq（810/1407 年没）の *K. al-Intisār li-wāsita 'iqd al-amsār* 『諸都市の中心への左袒』、al-Qalqashandī・al-Maqrīzī・Ibn ash-Shihna の各前掲書、Ibn Mājid（906/1500 年頃没）の *K. al-Fawā'id fī usūl 'ilm al-bahr wa-'l-qawā'id* 『航海学の原理と基礎に関する有益な事柄』などに利用・引用される。

al-Muhallabī の名で知られる Abū 'l-Husayn al-Hasan b. Ahmad は Misr の人（彼は al-Misrī

と呼ばれる)と言われ、既述のファーティマ朝カリフ al-'Azîz の時代、特に地理学の分野で活躍した人物で、詩人でもあったらしい。375/985 年?, このカリフに捧げる大作『諸道と諸国』(*K. al-'Azîzî* 『アズィーズの書』とも呼ばれる)を書き上げたと伝えられる。

未発見に近いこの書は、Yâqût と Abû 'l-Fidâ' と al-Qalqashandî の各前掲書の引用に従えば、街道や都市の記述に重きを置いた書であるが、扱う範囲は al-'Arab の島をはじめ、東は Mâ warâ' an-nahr から西は al-Andalus に至るまでの全イスラーム圏だけでなく、as-Sûdân, al-Qustantîniya・Rûmiya (ローマ)・Jalâliqa ほかの北方, al-Hind, 東海 (インド洋) の島々といったイスラーム圏周辺諸地域にも及んでいる⁵⁷⁾。

いわゆる Balkhî 学派の書とは異なるようだ (尤も、al-Ya'qûbî の『国々』(276/889 年頃)と比べれば、この学派の書により近い)が、Yâqût・Abû 'l-Fidâ'・al-Qalqashandî の各前掲書のほか、Abû Ja'far Jamâl ad-Dîn al-Idrîsî (649/1251 年没)の *K. Anwâr 'ulûw al-ajrâm fî 'l-kashf 'an asrâr al-ahrâm* 『ピラミッドの秘密を発見するための最上星の光』, Ibn al-'Adîm の前掲書, al-Qazwîni の『諸国の古跡』, Ibn Shaddâd・Ibn ash-Shihna の各前掲書にも利用・引用されている⁵⁸⁾。

また、al-Muhallabî は著名な天文学者 Ibn Yûnus (399/1009 年没) と共に、カリフ al-'Azîz のために世界地図を作成したとも言われる⁵⁹⁾ が、こちらの方はよく分からない。

al-Muqaddasî 或いは al-Maqdisî, すなわち al-Bayt al-muqaddas 或いは Bayt al-maqdis (共にエルサレムのこと) 出身の Abû 'Abd Allâh Muḥammad b. Ahmad b. Abû Bakr al-Bashshârî は、356/967 年に Makka 巡礼を行なって以来、イスラーム圏を Mâ warâ' an-nahr から al-Maghrib まで、様々な職業に就きながら (ある時期からはイスマール派の dâ'î?) 巡り歩いた人物で、375/985 年、地理書『諸州の知識に関する最良の区分』という地理書を著し、サーマーン朝に献じ、その3年後、それに手を加えたものを今度はファーティマ朝に献じたいらしい⁶⁰⁾。

この書は序章、海洋と河川、名前とその相違、諸州の特色、諸学派と庇護民、観察した基本項目、意見の異なる諸所、法学者のための要約【各県都とその都市圏】、世界の7“気候帯”とキブラの方向、イスラーム帝国、al-'Arab の島州、al-'Irâq 州、Aqûr (= al-Jazîra) 州、ash-Sha'm 州、Misr 州、al-Maghrib (al-Andalus を含む) 州、al-'Arab (諸州間) の荒野 (シリア沙漠)、al-Mashriq (= Mâ warâ' an-nahr と Khurâsân と Sijistân) 州、ad-Daylam 州、ar-Rihâb (= Âdharbayjân と ar-Rân と Armîniya) 州、al-Jibâl 州、Khûzistân 州、Fâris 州、Kirmân 州、as-Sind 州、これら al-'Ajam (非アラブ) 諸州間の沙漠 (イラン大沙漠) からなる。al-'Arab の島州以下は、各州ごとに概要【特徴、土地区分、主要都市の概観など】と諸事情【風土と特異集団、宗派と法学派とクルアーン読誦の流派、言語、交易、特産、度量衡と通貨、風習、水、鉱物、霊場、奇事、統治、租税など、最後に道程】が記される⁶¹⁾。そして、各州の特徴の後に彩色の地図が付いていたと考えられる⁶²⁾。

al-Muqaddasî の書は自らの観察結果を拠り所とし、足らない部分だけを先人たちの書物や信頼の置ける人物たちからの情報で補うという“科学”的な記述を目指した作品であり、内容も Balkhî 学派のそれまでの書よりも多項目にわたり、より体系立った地誌となってい

る⁶³⁾。但し、地図だけは、現存のもので見る限りは、al-Istakhriの地図とあまり変わっていない。以後、『諸州の知識に関する最良の区分』を凌駕するイスラーム圏地誌は現れなかったと言い得るが、残念ながら、Yāqūtの前掲書とal-Qazwīnīの『諸国の古跡』ぐらいしか、この書を利用・引用したことがはっきりしない。

〈続〉

前稿の註の残り

- 55) 'Arrām, *Kitāb Asmā' jibāl Tihāma wa-jibāl Makka wa-l-Madīna*, ed. Muhammad Sālih Shannāwī, Beirut : Dār al-Kutub al-'Ilmiya, 1410/1990 ; *Kitāb Asmā' jibāl Tihāma wa-sukkān-hā*, ed. 'Abd as-Salām Muhammad Hārūn, Cairo : Matba'at Lajnat at-Ta'lif wa-t-Tarjama, 1373/1956. Ibn al-Kalbīの『国々の語源』は、Yāqūt [*Mu'jam*, I, p.7] に拠る。al-Asmā'īの『アラビア半島 (アラブの島)』と『アラブの諸水 (水場)』とは、Ibn an-Nadīm [p.55] に拠る。この『アラビア半島 (アラブの島)』は、後ほど10世紀で扱うLughda al-Isbahānī著とされる*Bilād al-'Arab*『アラブの地』との関係が取りざたされており、また、『アラブの諸水 (水場)』は『アラビア半島 (アラブの島)』の別名ではないかと言う説もある [Hamad al-Jāsir, *Bilād al-'Arab*, Riyadh : Dār al-Yamāma, 1387/1968, p.40]。al-Asmā'īにはその他、Ibn an-Nadīm [p.55] に拠れば、*as-Sifāt*『諸特質』、*an-Nabāt wa-'sh-shajar*『草木』といった作品もあり、これらも地理を扱っているのではなかろうか。なお、上述のal-Harbīの巡礼案内書は、Ibn al-Kalbīやal-Asmā'īを利用している [pp.531, 537]。Abū 'Ubaydaの『メッカと聖域』と『溶岩 (溶岩性土地)』は、Ibn an-Nadīm [p.54] に拠る。更に、Ibn an-Nadīm [p.194] に拠ると、al-'Ayyāshī (Abū 'n-Nadr Muhammad b. Mas'ūd, 9世紀) にも、*K. Makka wa-l-Haram*『メッカと聖域』という作品があったらしい。Abū Zayd al-Ansārīの『諸水』は、Ibn an-Nadīm [p.55] に、Sa'dānの『両地と諸水と山岳と海洋』は、Ibn an-Nadīm [p.71] に、Shamr b. Hamdawayhの『山岳とワジ』は、Yāqūt [*Irshād*, IV, p.263] に、as-Sukkarīの『水源と町村 (或いは荒野)』は、Ibn an-Nadīm [p.78] とYāqūt [*Irshād*, III, p.63] に、それぞれ拠る。Ahmad Sūsaは、Abū 'Ubayda以下、as-Sukkarīまでのこれらの作品を、アラビア半島に関する著作として挙げている [*ash-Sharīf al-Idrīsī fī 'l-jughrāfiyā al-'Arabīya*, Part I, Baghdad : Niqābat al-Muhandisīn fī 'l-Jumhūrīyat al-'Irāqīya, 1974, pp.100~01, 131~33]。その他、al-Bakrī [*Mu'jam mā ista' jam* (*Das geographische Wörterbuch*), ed. F. Wüstenfeld, I, Göttingen, 1876, pp.4~5] やYāqūt [*Mu'jam*, I, p.7] に拠れば、Abū 'l-Ash'ath al-Kindī ('Abd ar-Rahmān b. 'Abd al-Malik, 9世紀) にも、Tihāmaの山々に関する作品があったらしい。また、言辞学者al-Hajarī (Abū 'Alī Hārūn b. Zakariyā, 9世紀) の*K. at-Ta'līqāt wa-'n-nawādir* [ed. Hammūd 'Abd al-Amīr al-Hammādī, 2 vols., Baghdad : Wizārat ath-Thaqāfa wa-l-'Ilām, Dār ar-Rashīd, 1980~81] もアラビア半島の水場・山岳・部族・植物などを取り扱っている。
- 56) *K. at-Tabassur bi-'t-tijāra*, ed. Hasan Husnī 'Abd al-Wahhāb, *Majallat al-Majma' al-'Ilmī al-'Arabī bi-Dimashq* (*Revue de l'Académie arabe de Damas*), XII, 1932, pp.326~55 ; Le *Kitāb al-tabassur bi-l-tigāra* attribué à Gāhiz, French tr., Ch. Pellat, *Gāhiziana*, I, Arabica, I, 1954, pp.153~65。ただし、Pellatはこの作品をal-Jāhiz著の193作品中に数えていない [*Gāhiziana* III, p.177]。また、A. MiquelはMā Shā' Allāh (820年没) の*K. al-As'ār*『価格』という先行作品を挙げる [前掲書, I, p.109]。
- 57) al-Azdī (al-Basrī), *Futūh ash-Shām*, ed. William Nassau Lees, Calcutta : Baptist Mission Press, 1854 ; al-Azdī, *Tārīkh futūh ash-Shām*, ed. 'Abd al-Mun'im 'Abd Allāh 'Āmir, Cairo : Mu'assasat Sijill al-'Arab, 1970. Ibn Zabāla, Akhbār al-Madīna, In : F. Wüstenfeld, *Geschichte der Stadt Medina nach Samhudi*, Göttingen, 1860. Ibn A'tham al-Kūfī, *K. al-Futūh*, ed. Muhammad 'Abd al-Mu'id Khān et al. 8vols, Hyderabad Deccan : Dā'irat al-Ma'ārif al-'Uthmāniya, 1388~95/1968~75. al-Wāqidī, *K. al-Maghāzī*, ed. J. Marsden Jones, 3vols, London : Oxford University Press, 1966. al-Azraqī, *Akhbār Makka* (*Die Geschichte und Beschreibung der Stadt Mekka von al-Azraqī*), ed. F. Wüstenfeld, Leipzig : F.A. Brockhaus,

1858 ; al-Azraqī, *Akhbār Makka*, ed. Rushdī as-Sālih Milhis, Makka : al-Matba'a al-Majidiya, 1352/1933. Ibn 'Abd al-Hakam, *Futūh Misr wa-akhbār-hā* (*The History of the Conquest of Egypt, North Africa and Spain*), ed. Charles C. Torrey, New Haven : Yale University Press, 1922. ['Umar] b. Shabba, *Ta'rikh al-Madīna al-munawwara*, ed. Fuhaym Muhammad Shaltūt, 4vols, Jedda : Bakrī Shaykh Amīn, n.d. ; 'Umar b. Shabba, *K. Akhbār al-Madīna*, ed. S. al-Ghannām, PhD thesis, Manchester University, 1973. Al-Ya'qūbī, *Ta'rikh* は註 48 を参照。al-Fākihī, *Ta'rikh Makka* (*Auszüge aus al-Fākihī*), ed. F. Wüstenfeld, *Die Chroniken der Stadt Mekka*, vol. II, Leipzig : F.A. Brockhaus, 1859 ; al-Fākihī, *K. Akhbār Makka*, ed. Fawwāz 'Alī Junaydīb ad-Dahhās, 2vols, PhD thesis, the University of Exeter, 1983. al-Balādhurī, *Futūh al-buldān* (*Liber expugnationis regionum*), ed. M.J. de Goeje, Leiden : E.J. Brill, 1866 ; al-Balādhurī, *Futūh al-buldān*, ed. 'Abd Allāh Anīs at-Tabbā' & 'Umar Anīs at-Tabbā', Beirut : Dār an-Nashr li-'l-Jāmi'iyīn, 1377/1958. [Ibn Abī Tāhir] Tayfūr, *Kitāb Baghdād* (*Sechster Band des Kitāb Baghdād*), ed. Hans Keller, Leipzig : O. Harrassowitz, 1908 ; Ibn Abī Tāhir Tayfūr, *Kitāb Baghdād*, ed. Muḥammad Zāhid b. al-Hasan al-Kawtharī, Cairo : Maktabat al-Khāngī, 1368/1949. Bahshal, *Ta'rikh Wāsit*, ed. Gurgīs 'Awwād, Baghdad : Matba'at al-Ma'ārif, 1387/1967.

Ibn Qutayba, *Uyūn al-akhbār*. ed. C. Brockelmann, 4vols, Weimar-Strassburg, 1898~1908 ; Ibn Qutayba, *Kitāb 'Uyūn al-akhbār*. 4vols, Cairo : Dār al-Kutub al-Misriya, 1343~48/1925~30 [reprint. Cairo : Al-Mu'assasa al-Misriya al-Āmma li-'t-Ta'lif wa-'t-Tarjama wa-'n-Nashr, 1964]. Ibn Qutayba, *Kitāb al-Ma'ārif* (*Handbuch der Geschichte*), ed. F. Wüstenfeld, Göttingen, 1850 ; Ibn Qutayba, *al-Ma'ārif*, ed. Muḥammad Ismā'il 'Abd Allāh as-Sāwī, Cairo : al-Matba'a al-Islāmiya, 1353/1934 [ed. Tharwat 'Ukāsha, Cairo : Matba'at Dār al-Kutub, 1960]. al-Jāhiz, *al-Hayawān* は註31 参照。その他, Yāqūt [*Mu'jam*, I, pp.695~6, II, pp.134, 539, III, p.920] が利用する Ahmad b. Sayyār (Abū 'l-Hasan, b. Ayyūb al-Marwazī, 881 年没) の Marw 史や, Ibn 'Abd al-Hakam の『エジプト征服史』の主要なソースの一つで, al-Bakrī の『諸道と諸国』も利用する Sa'id b. 'Ufayr (840 年没) の al-Andalus 史 [A. Ferré, *Les sources du Kitāb al-masālik wa-l-mamālik d'Abū 'Ubayd al-Bakrī*, *IBLA* (Tunis) 49, 1986, pp.193~94], 後述する Ahmad ar-Rāzī の al-Andalus 誌や al-Bakrī の『諸道と諸国』も利用する 'Abd al-Malik b. Ḥabīb as-Sulamī (852 年没) の *Ta'rikh* 『歴史』 [A. Ferré, 上掲論文, pp.195~96] など、地理情報を含んでいる。

- 58) Ibn an-Nadīm [p.52] に拠れば、この書は 5 部からなり、第 1 部は人間の性格、第 2 部はテントと家屋、山岳と裂け目、道具、第 3 部は駱駝、第 4 部は太陽と月や、ミルクと茸、井戸や水槽など、第 5 部は作物、葡萄、草木、風、雲、雨を扱っている。

前稿の訂正箇所

- ① p.193 al-Khuwārizmī の地理書の利用・引用として, Ibn al-Faqīh (903 年以後没) の *K. al-Buldān* と ad-Dimashqī (1327 年没) の *K. Nukhbat ad-dahr fi 'aja' ib al-barr wa-'l-baḥr* 『陸と海との奇事に関する時代の精髓』とを追加。
- ② pp.198 ~ 99 Ibn Khurdādhbih の地理書の利用・引用として, Qudāma の前掲書と Ibn al-Qāss (946 年没) の *K. Dalā'il al-qibla* 『キブラ案内』と al-Himyarī (1494 年没) の *K. ar-Rawd al-mi'tār fi khabar al-aqtār* 『国々の情報に関する香しい庭園』とを追加。
- ③ p.200 al-Ya'qūbī の『国々』の利用・引用から, (de Goeje は挙げているが) Ibn Taghrī Birdī (1469 年没) の *K. an-Nujūm az-zāhira fi mulūk Misr wa-'l-Qāhira* を削除。
- ④ p.201 'Arrām の *K. Asmā' jibāl Tihāma wa-sukkān-hā* 『ティハーマの山々とその住民の名前』を *K. Asmā' jibāl Tihāma wa-jibāl Makka wa-'l-Madīna* 『ティハーマの山々やメッカとメディナの山々の名前』に変更。
- ⑤ p.201 al-Azraqī の *K. Akhbār Makka* の利用に al-Bakrī の『諸道と諸国』を追加。
- ⑥ pp.201 ~ 02 al-Balādhurī の *K. Futūh al-buldān* の利用に Qudāma の前掲書を追加。

本稿の註

- 1) André Miquel [*La géographie humaine du monde musulman jusqu'au milieu du 11e siècle*, vol. I, Paris & The Hague: Mouton, 1967] に従う。
- 2) al-Muqaddasī, *K. Ahsan at-taqāsīm fī ma'rifat al-aqālīm* (*Descriptio imperii moslemici*), ed. M. J. de Goeje, BGA. III, Leiden (Lugduni-Batavorum): E. J. Brill, 1877—以下, この書を *Ahsan* と略記—, p.5。また, Ibn an-Nadīm [*Kitāb al-Fihrist*, ed. Gustav Flügel, vol. I, Leipzig, 1871—以下, 書名を省略し, Ibn an-Nadīm とだけ表記—, p.154] はこの書が約 1000 葉と言っている。
- 3) Mashhad (Meshed) <Ridawīya 図書館> 写本 5229—以下, これを Mashhad 写本と呼ぶ—。なお, この Mashhad 写本 [folia 173a] はこの書を *Kitāb Akhbār al-buldān* と記す。
- 4) *Mukhtasar Kitāb al-Buldān* (*Compendium libri Kitāb al-Boldān*), ed. M. J. de Goeje, BGA. V, Leiden: E. J. Brill, 1885, pp.1-330。A. Miquel [前掲書, pp.157-60] は, この ash-Shayzarī の *Mukhtasar* がその内容と構成に関しては原テキストに近く, 原テキストの大凡 81% を伝えていると言う。
- 5) Mashhad 写本 folia 1b-173a [*Collection of Geographical Works by Ibn al-Faqīh, Ibn Faqlān, Abū Dulaf al-Khazrajī*, ed. Fuat Sezgin, Frankfurt am Main: Institut für Geschichte der Arabisch-Islamischen Wissenschaften, 1987—以下, この書を *Collection* と略記—, pp.1-347]。なお, 前記の ash-Shayzarī の *Mukhtasar* とこの Mashhad 写本とを併せたテキストに, *Kitāb al-Buldān*, ed. Yūsuf al-Hādī, Beirut: 'Ālam al-Kutub, 1416/1996, pp.55-649—上記の註 4 の部分も含む—がある。
- 6) 後述する al-Muqaddasī の *Ahsan*, [p.4] も, この書は al-Jāhiz の *K. al-Amsār* に似ていると言う。その他, Ibn an-Nadīm [p.219] は, この書の主な情報源を後述する al-Jayhānī とする。
- 7) *Ahsan*, pp.4, 241。
- 8) Charles Pellat [Mas'ūdī et l'Imāmisme, *Le Shī'isme Imāmīte*, ed. R. Brunschvig & T. Fahd, Paris, 1970, p.70] をはじめ, Tarif Khalidī [*Islamic Historiography The Histories of Mas'ūdī*, Albany: State University of New York Press, 1975, p.xvi] や Ahmad Shboul [*Al-Mas'ūdī & his World*, London: Ithaca Press, 1979, p.16] などは, Mas'ūdī が 12 イマーム派であったと考える。他方, A. Miquel [前掲書, pp.205-06] や M. S. Khān [*Al-Mas'ūdī and the Geography of India*, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 131, 1981, p.120] はイスマーイール派説をとる。
- 9) 『黄金の牧場』と『提言と再考』のほか, 『時代の情報』, *al-Kitāb al-Awsat* 『中間の書』, *K. Funūn al-ma'ārif wa-mā jarā fī d-duhūr as-sawālif* 『各種の知識と過去の時代に起こったこと』, *K. Dhakhā'ir al-'ulūm wa-mā kāna fī sālif ad-duhūr* 『諸学の財宝と過去の時代にあったこと』, *K. al-Istidhāk li-mā jarā fī sālif al-a'sār* 『過去の時代に起こったことの回顧』があったらしい。詳細は拙稿「マスウディー著『黄金の牧場と宝石の鉱山』の第三～第六章をめぐる(1)」『大阪外国語大学論集』4, 1990, pp.288-90 を参照。
- 10) *Murūj adh-dhahab wa-ma'ādin al-jawhar* (*Les prairies d'or*), revised ed. Ch. Pellat, Beirut: al-Jāmi'at al-Lubnāniya (l'Université Libanaise)—以下, この版を *Murūj* と略記—, vol. I, 1965, pp.148, 151。
- 11) *Murūj*, vol. I, pp.84-244, vol. II, 1966, pp.44-45, 65-152, 179-89, 360-411。その他, 第46章が al-'Arab · al-Barbar · al-Akrād (クルド) の遊牧民, 第48章～第53章が al-'Arab の魔霊や占い, 第54章～第60章が暦, 第61章が太陽と月を扱っている。
- 12) 西暦 10 世紀のアラビア語地理作品の中では, 『黄金の牧場』はインドやスラブ関係を中心に特に研究が多い。代表的と思われるものだけでも, *Al-Mas'ūdī Millenary Commemoration Volume*, ed. S. Maqbul Ahmad & A. Rahman, Aligarh: Aligarh Muslim University, 1960 や, F. -B. Charmoy, *Relation de Mas'oudy et d'autres auteurs musulmans sur les anciens Slaves*, *Mémoires de l'Académie impériale des sciences de St. Pétersbourg*, VI e série, 2, 1834, pp.297-408; J. J. Modi, *Mas'ūdī's account of the Pesdadian Kings*, *Journal of the K. R. Cama Oriental Institute*, 27, 1933, pp.6-35; V. V. Barthold, *Arabskie Izvestia o Rusakh*, *Sovetskoe Vostokovedenie*, 1, 1940, pp.15-50; J. Widajewicz, *Mas'ūdī o Wioletach*, *Pamiętnik Słowiański*, 1, 1949, pp.55-82; T. Lewicki, *Świat słowiański w oczach pisarzy arabskich* (Le monde slavon vu par les écrivains arabes), *Slavia Antiqua*, 2, 1949, pp.321-88; *Ibid.* Jeszcze o Wioletach w opisie słowiańszczyzny arabskiego pisarza sXw. al-Mas'ūdī'ego, *Pamiętnik Słowiański*, 2, 1951, pp.107-20; S.

- Maqbul Ahmad, Al-Mas'ûdî's Contributions to Medieval Arab Geography, *Islamic Culture*, 27 (1953), pp.61-77, 28 (1954), pp.275-86 などが挙げられる。
- 13) *Kitâb at-Tanbîh wa-l-'ishrâf* (*Kitâb at-Tanbîh wa-l-'Ischrâf*), ed. M. J. de Goeje, BGA. VIII, Leiden : E. J. Brill, 1894—以下, この書を *Tanbîh* と略記—, pp.7-85 [2-401]。
 - 14) 拙稿「Iqlîm 考—Yâqût を基に—」『オリエント』26 の 2, 1983, pp.78-80, 83 参照。
 - 15) *Murûj*, vol. I, p.172。
 - 16) (*Relations des voyages faits par les Arabes et les Persans dans l'Inde et la Chine dans IX^e. de l'ère chrétienne*) ed. M. Reinaud, Paris, 1845, pp. 60-148 ; Sulaymân at-Tâjir & Abû Zayd as-Sîrâfî, *Akhbâr as-Sîn wa-l-Hind*, ed. Ibrâhîm Khûrî, Beirut : Dâr al-Mawsim li-l-'Ilâm, 1991, pp.59-95。
 - 17) Mashhad 写本 fol. 196b-212b [*Collection*, pp.390-420] ; *Risâlat Ibn Fadlân*, ed. Sâmî ad-Dahhân, Damascus, 1379/1959 [2nd edition, Damascus : Mudîrîyat Ihya' at-Turâth al-'Arabî, 1977, pp.97-194] ; *Rihlat Ibn Fadlân* (*Ibn Fadlân's Reisebericht*), ed. A. Zeki Validi Togan, Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes—以下, Abh KM と略記—, 24・3, Leipzig : Deutsche Morgenländische Gesellschaft, 1939, pp.3-45 (pp.338-80)。これらほかに基づく邦訳, 家島彦一訳注『イブン・ファドランのヴォルガ・ブルガル旅行記』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 1969 がある。
 - 18) al-Qazwîni, *Âthâr al-bilâd wa-akhbâr al-'ibâd*, Beirut : Dâr Sâdir, 1380/1960—以下, この版を *Âthâr* と略記—, p.97。
 - 19) Mashhad 写本 fol. 173a-182b [*Collection*, pp.347-62] ; Yâqût, *Mu'jam al-buldân* (*Jacut's Geographisches Wörterbuch*), ed. Ferdinand Wüstenfeld, Leipzig, 1924—以下, この版を *Mu'jam* と略記—, vol. III, pp.445-58 ; al-Qazwîni, *Âthâr*, pp. 45-6, 81, 94, 97, 104-5, 105, 106-7, 121-2, 124, 588, 606-7。また, Ibn an-Nadîm [pp.346-7] は, Abû Dulaf が直接語ったとする al-Hind の寺院の記事を載せる。
 - 20) Mashhad 写本 fol. 182b-196b [*Collection*, pp.362-90] ; *ar-Risâla ath-Thâniya li-Abî Dulaf Mis'ar b. al-Muhalhil al-Khazrajî* (*Abû-Dulaf Mis'ar ibn Muhalhil's Travels in Iran*), ed. V. Minorsky, Cairo : Wizârat at-Tarbiya wa-t-ta'lim (Egyptian Ministry of Education), 1955, pp.1-31 ; *Vtoraia zapiska Abu Dulafa*, ed. P. G. Bulgakov & A. B. Khalidov, Moscow : Akademii nauk SSSR, 1960, pp.1-47。これらに基づく邦訳, イスラーム地理書・旅行記研究会訳注『アブー・ドゥラフ イラン旅行記』京都大学文学部羽田記念館 1988 がある。
 - 21) 家島彦一「ブズルク・ブン・シャフリヤール『インド奇談集』に関する新資料」『アジア・アフリカ言語文化研究』59, 2000, pp.18-19。
 - 22) *Kitâb 'Ajâ'ib al-Hind* (*Livre des Merveilles de l'Inde*), ed. P. A. van der Lith, Leiden : E. J. Brill, 1883, pp.1-192 ; *'Ajâ'ib al-Hind*, ed. Yûsuf ash-Shârûnî, London : Riad El-Rayyes Books, 1990, pp.47-151。前者に基づく邦訳, 藤本勝次・福原信義訳注『インドの不思議』関西大学出版・広報部 1978 がある。なお, 2 巻本と考えられるのは, 第 77 話の最後に「以上で第 1 部が終わり, 次に an-Niyân 島の情報が第 2 部に続く」とあるからだ [ed. P. A. van der Lith, p.125 ; ed. Yûsuf ash-Shârûnî, p.112]。
 - 23) E. Littmann, Alf Layla wa-Layla, *The Encyclopaedia of Islam*, New edition—以下, *EL*² と略記—, vol. I, Leiden : E. J. Brill, London : Luzac & Co., 1960, p.363。
 - 24) 家島彦一, 前掲論文, pp.9-27。なお, この西暦 10 世紀に, al-'Umarî のこの書に拠ると, Abû 'Imrân Mûsâ b. Rabâh al-Awsî なる者がイフシード朝の実権を握っていた Kâfûr (357/968 年没) のために *as-Sahîh min akhbâr al-bihâr wa-'ajâ'ib-hâ wa-mâ yata'allaqu bi-dhâlika*『諸海とその奇事の情報およびそれに関連したことの真正集』を作成したらしい [家島彦一, 前掲論文, pp.17-18]。
 - 25) G. S. P. Freeman - Grenville["Some Thoughts on Buzurg ibn Shahriyar al-Ramhormuzi : *The Book of the Wonders of India*", *Paideuma*, 28, 1982, p.64] は, この作品が al-Mas'ûdî や後の者たちに知られていたと言う。また, G. R. Tibbetts [*A Study of the Arabic Texts Containing Material on South-East Asia*, Leiden & London : E. J. Brill, 1979, p.9] は, この作品が『諸奇事の要約』の一つのソースであると言う。更に彼 [上掲書, p.12] は, al-Qazwîni の *K. 'Ajâ'ib al-makhlûqât* がこの作品を利用しているとも言う。
 - 26) al-Maqrîzî の *al-Mawâ'iz wa-l-'tibâr fî dhikr al-khitat wa-l-âthâr* [Bûlâq, 1270/1853—以下, この書を

- Mawā'iz* と略記一, vol. I] は, この書を *K. Akhbār an-Nūba wa-l-Maḡurra wa-l-'Alwa wa-l-Buḡa wa-n-Nīl* と呼んだり [p.190], *K. Akhbār an-Nūba* と呼んだりする [p.65]。al-Manūfi の *K. al-Fayḍ al-madīd fī akhbār an-Nīl as-sa'id* [ed. Bargès—以下, この書を *Fayḍ* と略記一, *Journal Asiatique*, 3・3, 1837, p.119] は *K. Akhbār an-Nūba* と呼ぶ。
- 27) al-Maqrzī, *Mawā'iz*, vol. I, pp.190-5; al-Manūfi, *Fayḍ*, *Journal Asiatique* 3・3, 1837, アラビア語テキスト pp.119-26, 152-4, 3・9, 1840, pp.113-5, 127-8; Hamad Mohammad Kheir, A Contribution to a Textual Problem: Ibn Sulaym al-Aswānī's Kitāb Akhbār al-Nūba wa l-Maḡurra wal-Buḡa wa l-Nīl, *Annales islamologiques*, Institut français d'archéologie orientale du Caire, 21, 1985, アラビア語テキスト pp.49-72。
- 28) そのほか, H. M. Kheir [上掲論文, p.12] に拠れば, al-Qāḍi Ma'rūf (西暦 16 世紀前半活躍) の *K. 'Ajā'ib al-akhbār 'an Miṣr al-amsār* にも引用されている。また, Kheir [上掲論文, p.14] は Ibn Sulaym が al-Jāhiz や Ibn 'Abd al-Hakam などを利用・引用していると言う。
- 29) (al-Mas'ūdī, *Akhbār az-zamān wa-man abāda-hu al-hidhān wa-'ajā'ib al-buldān wa-l-ghāmīr bi-l-mā' wa-l-'umrān*), ed. 'Abd Allāh as-Sāwī, Cairo: Matba'at al-Hanafi, 1357/1938 [3rd ed. Beirut: Dār al-Andalus, 1978, pp.23-278] (但し, {} 内は欠けている); *L'Abrégé des Merveilles*, traduit de l'arabe d'après les manuscrits de la Bibliothèque Nationale de Paris par le B. Carra de Vaux, Paris: Librairie Klincksieck, 1898 [reprint by André Miquel, Paris: Sindbad, 1984, pp.37-341]。
- 30) 前者の写本は Paris (国立図書館) 写本 1471, 後者は Paris (国立図書館) 写本 1472 である。Carra de Vaux [*L'Abrégé des Merveilles*, pp.XXX-XXXIII, reprint, 1984, p.32] はこの作品の第 1 部は al-Mas'ūdī の作とすることも可能だが, 第 2 部は彼のものではなさそうだと言っているが, 『諸奇事の要約』の第 1 部と第 2 部とは本来, 別作品であった可能性もある。そして, M. C. F. Seybold [*Orientalistische Literatur-Zeitung* (Leipzig) 5, 1898, pp.146-50] や Gabriel Ferrand [*Relations de voyages et textes géographiques arabes, persans et turks, relatifs à l'Extrême-Orient du VIIIe au XVIIIe siècles*, vol. I, Paris: Ernest Leroux, 1913, p.137] をはじめ, A. Miquel [前掲書, p.xxxv] などは, 原著者を Ibrāhīm b. Wasīf Shāh と考え, この作品を 1000 年頃と見なしている。他方, 上記 (註 29) のように, 'Abd Allāh as-Sāwī はこの作品を al-Mas'ūdī 著と考えているが, T. Khalidi [前掲書, p.154] は, この作品が al-Mas'ūdī のものか疑問だとする。また, D. M. Dunlop [*Arab civilization to AD 1500*, London: Longman, Beirut: Librairie du Liban, 1971, p.113] は, この作品は Ibrāhīm b. Wasīf Shāh が al-Mas'ūdī の『時代の情報』を利用して著したものと考えているようだ。なお, F. Wüstenfeld [*Die Geschichtschreiber der Araber und ihre Werke*, Göttingen, 1822, no. 373a] 以来, Ibn Wasīf Shāh は西暦 12~13 世紀にエジプトに生きた人物とされることが多い。因みに, Sayyid Kasrawī Hasan [Ibrāhīm ibn Wasīf Shāh, *Mukhtasar 'ajā'ib ad-dunyā*, ed. Sayyid Kasrawī Hasan, Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmiya, 2001] は, Ibn Wasīf Shāh が al-Mas'ūdī の『黄金の牧場』を利用した *Mukhtasar 'ajā'ib ad-dunyā* 『この世の諸奇事の要約』を著したと考える。
- 31) Ursula Sezgin, Al-Mas'ūdī, Ibrāhīm b. Wasīf Shāh und das Kitāb al-'Aḡā' ib. Aigyptiaka in arabischen Texten des 10. Jahrhunderts n. Chr., *Zeitschrift für Geschichte der Arabisch-Islamischen Wissenschaften*, 8, 1993, pp.1-70; Ursula Sezgin, Pharaonische Wunderwerke bei Ibn Wasīf as-Sābi' und al-Mas'ūdī. Einige Reminiszenzen an Ägyptens vergangene Grösse und an Meisterwerke der alexandrinischen Gelehrten in arabischen Texten des 10. Jahrhunderts n. Chr., *Zeitschrift für Geschichte der Arabisch-Islamischen Wissenschaften*, 9, 1994, pp.229-91。この Ibn Wasīf as-Sābi' なる人物は, U. Sezgin [上掲書 1993, p.6; 上掲書 1994, pp.229-30] に従えば, Harrān 出身のサービー教徒で, 西暦 10 世紀に眼科医として Baghdād で活躍し, 自然哲学にも通じていた人物らしい。
- 32) al-Bakrī, *Kitāb al-Masālik wa-l-mamālik*, ed. A. P. van Leeuwen & A. Ferré, Tunis: ad-Dār al-'Arabiya li-l-Kitāb, 1992—以下, この版を al-Bakrī *Masālik* と略記一, pp.210-24。
- 33) 拙稿『海のシンドバード物語とアラビア語地理書との関係について』『中東イスラム文化の諸相と言語研究』大阪外国語大学 1999, pp. 269-70 (pp.255-74)。
- 34) Tibbetts [前掲書, p.12] は al-Qazwīnī の '*Ajā'ib al-makhlūqāt* がこの作品を利用していると言う。なお, al-Bakrī の *Masālik* は, 上記 (註 32) の著者名無記の『国々の諸奇事』からとする諸海の奇事

に関する引用或いは利用のほかに、al-Wasifîが言った或いは述べたとして、Nûhに関する記述 [pp.75, 78, 79], そしてMisrの王たちに関する記述 [pp.541, 547, 548, 549, 551] も載せており、Leeuwen & Ferré [al-Bakrî *Masâlik*, introduction pp.19-20] は、このal-WasifîをIbrâhîm Wasif Shâhであろうと考える。その場合、Ibrâhîm Wasif Shâhはal-Bakrîより前か同時代、すなわち11世紀以前の人物ということになる。第2部のエジプトの伝説的歴史の箇所は、al-Bakrîの*Masâlik*のほかに、12世紀の著者不詳の『諸都市の奇事の熟考』[al-Wasifîとして]、an-Nuwayrîの前掲書 [Ibrâhîm b. Wasif Shâhの*Kitâb al-'Ajâ'ib al-kabîr*の要約として]、al-Maqrizîの前掲書 [Ibrâhîm b. Wasif Shâhの*Akhbâr Misr wa-'ajâ'ib-hâ*として]、Ibn Iyâsの『国々の奇事に関する花々の香り』[Ibn Wasif Shâhとして]などに引用・利用されている。

- 35) ヘブライ語で書かれた可能性もある。
- 36) 以上、al-Bakrî, *Masâlik*, pp.330-40, 913-5; al-Qazwînî, *Âthâr*, pp.556, 575, 590, 601-2, 607, 608; al-'Udhri, *Nizâm al-marjân fî 'l-masâlik wa-'l-mamâlik (Tarsî al-akhbâr wa-tanwî' al-âthâr wa-'l-bustân fî gharâ'ib al-buldân wa-'l-masâlik ilâ jamî' al-mamâlik)*, partial ed. 'Abd al-'Azîz al-Ahwânî, *Nusûs 'an al-Andalus*, Madrid: Ma'had ad-Dirâsât al-Islâmiya, 1965, p.7。
- 37) al-Bakrîの*Masâlik* [pp.330-35] は、極西にあるNâqûn (北ドイツのSchwerin-Mecklenburg地方に住むObodr人たちの首長Naccon)の国、Frâgha (プラハ)とBawyima (ボヘミア)とKarâkwa (クラコウ)との王Buwayaslâw (Boleslas 1世, 在位929-67)の国、北の王Mashquh (ポーランド王Mieszko 1世, 在位960-92)の国、al-Bulqârûn (ブルガリア人たち)の王(おそらくはTsar Peter, 在位927-69)の国について記す。
- 38) *Tanbîh*, p.75; Ibn an-Nadîm, p.147。その他、al-Idrisîの前掲書を始め、Abû Hâmid al-Gharnâtî (565/1170年没)の*K. Tuhfat al-albâb wa-nukhbat al-'ajâ'ib*『理性の贈物と驚異の精髓』、al-'Umarîの前掲書などが載せる、Lishbûna (リスボン)からBahr az-zulmât (暗黒の海、すなわち大西洋)に船出して、「羊の島」(マデイラ島か)や人の住む島(カナリア諸島の一つか)に至り、最終的には、Asfî (現モロッコのSafi)にたどり着いたという、al-Mugharrirûn (冒険者たち)或いはal-Maghrûrûn (向こう見ずな者たち)とあざなされる8名の若者の探検旅行の記録も、Ignat'y Yulianovich Krachkovskiy [*Arabskaya geograficheskaya literatura, Izbrannye sochineniya*, IV, Moscow & Leningrad: Ak. nauk SSSR, 1957, p.135]に従えば、この4/10世紀のものらしい。尤も、Dunlop [前掲書, pp.162-3]は3/9世紀の可能性もあるとする。更には、Sayyid Maqbul Ahmad [*A History of Arab-Islamic Geography (9th -16th Century A.D.)*, Amman: Al al-Bayt University, 1416/1995, p.57]は、400/1009年頃にインドの船でアフリカ東岸に沿って航海したKhawâshîr b. Yûsuf al-Arkîが著した『航行案内』Rahmânîを挙げている。
- 39) M. J. de Goeje, Die Istakhri – Balkhî Frage, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 25, 1871, p.57; Krachkovskiy, 前掲書, pp.195-6。また、Ibn al-Wardî [*Kharîdat al-'ajâ'ib wa-farîdat al-gharâ'ib*, ed. Mahmûd Fâkhûrî, Aleppo: Dâr ash-Sharq al-'Arabî, 1411/1991, p.10]は*Taqwîm al-bilâd*『国の調査表』と呼んでいる。なお、V. Minorsky [*Sharaf al-Zamân Tâhir Marvazî on China, the Turks and India*, London: the Royal Asiatic Society, 1942, p.90, no.1]はHamd Allâh Mustaufî (750/1349年没)の*Nuzhat al-qulûb*『心の歓喜』というペルシア語で書かれた百科全書が利用する*Suwar al-aqâlim*と、al-Bîrûnî (440/1048年没)の*K. al-Jamâhir fî ma'rifat al-jawâhir*『宝石の知識に関する集成』[ed. F. Krenkow, Hyderabad: Dâ'irat al-Ma'ârif al-'Uthmâniya, 1936, pp.204, 216, 246]が言及する*Ashkâl al-aqâlim*とを、「al-Balkhîの?」としている。その他、Ibn al-'Adîmの前掲書 [M. Canard, Quelques observations sur l'introduction géographique de la Bughyat at-'T'alab de Kamâl Ad-Dîn ibn Al-'Adîm d'Alep, *Annales de l'institut d'études orientales* (Alger) 15, 1957, p.43]やIbn ash-Shihnaの前掲書 [*Ta'rikh Halab*, ed. Keiko Ohta, Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, 1990, p.163]はおそらくこの作品を*Kitâb Sûrat al-ard*と呼んでいる。
- 40) *Ahsan*, p.4。
- 41) S. Maqbul Ahmad, Djughrâfiyâ, *El.*², vol. II, Leiden: E. J. Brill, London: Luzac&Co, 1965, pp.581-2; S. M. Ziauddin Alavi, *Arab Geography in the Ninth and Tenth Centuries*, Aligarh: Aligarh Muslim

- University, 1965, pp.37-9. Krachkovskiy [前掲書, pp.194-218] は、古典学派と呼ぶ。
- 42) Ibn an-Nadīm [p.138] は、al-Balkhī の著作の一つに、「Abū Ja'far al-Khāzin による天界と世界の書の諸図の解説」なる書を挙げている。それで、A. Sprenger [*Die Post-und Reiserouten des Orients*, Abh KM, 3・3, 1864, pp.xiii-xiv] や C. A. Nallino [*Le Tabelle geografiche d'al-Battani*, tradotte ed annotate dal C. A. Nallino. *Cosmos*, 12, Torino, 1896, p.46, note 2] は、al-Balkhī が Abū Ja'far al-Khāzin の地図に基づいたのではないかと推測し、V. V. Barthold (1930) [V. Minorsky, *Hudūd al-'Ālam 'The Regions of the World'*, London: Luzac & Co, 1937, p.xv, 18, note 5] も、al-Balkhī の地理書が Abū Ja'far al-Khāzin の諸地図の説明書に過ぎないかも知れないと言ったが、Krachkovskiy [前掲書, p.207] は Abū Ja'far al-Khāzin (Muhammad b. al-Hasan al-Khurāsānī) は 350/961 年以後に没したと考えられ、al-Balkhī より遥に年下であり、Sprenger 以下の説は成り立たないと言う。いずれにせよ、天文学者 al-Khāzin も地図 (経緯度を用いた地図か否かは不明) を作製したらしい。Ibn an-Nadīm [p.138] は更に、al-Balkhī の著作の一つとして、*K. Fadā'il Makka 'alā sār'ir al-biqā'* 『メッカが他地点に対して持つ長所』なる書も挙げている。
- 43) 執筆を前世紀の 266/880 年とする説もある [Ahmad Sūsa, *ash-Sharīf al-Idrīsī fī 'l-jughrāfiyā al-'arabiya*, Part I, Baghdad: Niqābat al-Muhandisīn fī 'l-Jumhūrīyat al-'Irāqīya, 1974, pp.98, 135; Z. Alavi, 前掲書, pp.27-8]。
- 44) *al-Kharāj wa-sinā'at al-kitāba*, ed. Muhammad Husayn az-Zabīdī, Baghdad: Dār ar-Rashīd, 1981, pp.77-200; *Nubadh min Kitāb al-Kharāj wa-sinā'at al-kitāba (Excerpta e Kitāb al-Kharāj)*, ed. M. J. de Goeje, BGA. VI, Leiden: E. J. Brill, 1889, pp.184-266。
- 45) この地理書の執筆を、al-Balkhī の生存中の 320/932 年頃ではないかとする説 [Dunlop, 前掲書, p.164] や、318-21/930-3 年とする説 [A. Sūsa, 前掲書, p.159] もある。この地理書は *al-Masālik wa-'l-mamālik* [ed. Muhammad Jābir 'Abd al-'Āl al-Hīnī, Cairo: Dār al-Qalam, 1381/1961—以下、この書を Hīnī 版と略記—], 或いは *Kitāb Masālik al-mamālik [(Viae regnorum descriptio ditionis moslemicae)*, ed. M. J. de Goeje, BGA. I, Leiden: E. J. Brill, 1870] のほか、*Kitāb al-Aqālīm [(Liber climatum)*, ed. J. H. Moeller, Gotha: Libreria Beckeriana, 1839] とか、*Kitāb al-Ashkāl* [BGA, I, p.348] と呼ばれている。また、al-Istakhri はこの書とは別に、Fāris に関する risāla も著したようだ [Hīnī 版, p.67]。
- 46) Hīnī 版, pp.15-192. cf. BGA. I, pp.2-348. 本来の地図は彩色されていたらしい [A. Sūsa, 前掲書, p.160]。
- 47) J. H. Kramers, La question Balhī—İstakhri—Ibn Hawkal et l'Atlas de l'Islam, *Acta Orientalia*, 10, 1932, pp.9-30。
- 48) J. H. Kramers, L'influence de la tradition iranienne dans la géographie arabe, *Analecta Orientalia* I, Leiden: E. J. Brill, 1954, pp.153-6。
- 49) 拙稿「Iqlīm 考—Yāqūt を基に—」, pp.78-81。
- 50) ペルシア語の翻訳としては、5/11 世紀か 6/12 世紀と考えられる作品 [*Masālik va Mamālik, ta'lif-i Abū Ishāq Ibrāhīm Istakhri*, ed. Īraj Afshār, Tehran: Bungāh-i Tarjumah va Nashr-i Kitāb, 1347/1969] —726/1325 年筆写の Tehran, Mūzah-i Īrān-i Bāstān, MS. 3515—や、W. Ouseley が英訳した *Suwar al-buldān* というペルシア語テキスト [*The Oriental Geography of Ebn Haukal*, London, 1800] —670/1272 年筆写の Oxford, Bodleian Library, MS. Ouseley 373—ほかがある。地図もペルシア語世界で評判になる。
- 51) また、Yāqūt の *Mu'jam* [vol. I, p.375] は彼を “at-tājir al-Mawsilī (モースルの商人)” としている。その他、Baghdād 出身説 [A. Sūsa, 前掲書, p.170] もある。
- 52) Reinhart Dozy, *Histoire des Musulmans d'Espagne*, vol. III, Leiden: E. J. Brill, 1861, pp.17, 21, 181-2。
- 53) Ibn Hawkal は as-Sind の章の最後で、al-Istakhri との出会いを記すが、as-Sind で会ったとは言っていない [*Kitāb Sūrat al-ard (Opus geographicum "Liber imaginis terrae")*, ed. J. H. Kramers, BGA. II, Leiden: E. J. Brill, 1938—以下、*Sūrat* と略記—, p.329]。Krachkovskiy [前掲書, p.198] は両者の出会いを 340/951-2 年と考える。そして J. H. Kramers & G. Wiet [*Ibn Haukal, Configuration de la Terre*

- (*Kitab Surat al-Ard*), tr. J. H. Kramers & G. Wiet, Beirut : Commission Internationale pour la Traduction des Chefs-d'Oeuvre, Paris : G. -P. Maisonneuve & Larose, 1964 —以下, *Configuration* と略記—, vol. I, p.x, vol. II, p.322]は as-Sind で会ったと考え, M. J. 'A. al-Hinī[Hinī 版, p.9]は 325AH に Baghdād で会ったと考える。
- 54) Krachkovskiy, 前掲書, p.199; Kramers & Wiet, *Configuration*, vol. I, p.xiii. 初稿に拠った M. J. de Goeje 版は *K. al-Masālik wa-l-mamālik* という書名を持つ [BGA. II, Leiden : E. J. Brill, 1873]。
- 55) *Sūrat*, pp.1-528。
- 56) 534-80/1139-84 年頃[Kramers, *Sūrat*, p.v]に, その要約がアラビア語で著されている—849/1445 年? 筆写の MS. Arabe 2214, Paris, Bibliothèque Nationale—。
- 57) Yāqūt, *Mu'jam*, vol. I, pp.276, 335 など 10 箇所; vol. II, pp.90, 111 など 9 箇所; vol. III, pp.19, 126, 246 など 16 箇所; vol. IV, pp.54, 72, 75 など 22 箇所。Abū 'l-Fidā', *Taqwīm al-buldān*, ed. M. Reinaud & M. G. de Slane, Paris : L'imprimerie royale, 1840, pp.22, 48, 53, 82, 87, 89, 93, 95, 97, 99 など 223 箇所。Al-Qalqashandī, *Subh al-a'shā fī sinā'at al-inshā'*, Cairo : al-Mu'assasa al-Misriya al-'Āmma, 1963, vol. III, p.394, vol. IV, pp.82, 99, 102, 104, 111, 113, 114, 122, 123-4 など 69 箇所。特に, ビザンツ帝国とアッバース朝の領土で, このファーティマ朝カリフが征服を狙う地域に関する情報が詳しいのではなかろうか。
- 58) Muhammad b. al-Hasan al-Kilā'ī (5 /11 世紀?) なる人物が Muhallabī の書の一部を引用している [Salāh ad-Dīn al-Munajjid, *Qit'a min kitāb mafqūd, al-masālik wa-l-mamālik li-'l-Muhallabī, Majallat ma'had al-makhtātāt al-'arabiya*, 4, Cairo, 1958, pp.49-65]。
- 59) S. Maqbul Ahmad [Kharīta, *El'*, vol. IV, Leiden : E. J. Brill, 1978, p.1079] に従えば, “気候帯” iqlīm を用いた, いわゆる Ptolemaios 系統の地図と考えられる。
- 60) 拙稿「ムカッダシーの『諸州の知識に関する最良の区分の書』について」『大阪外国語大学学報』64, 1984, p.106。なお, Aya Sofya 2971 写本では単に *Kitāb al-Aqālim* 『諸州の書』とも呼ばれている。
- 61) *Ahsan* [K. *Ahsan at-taqāsim fī ma'rifat al-aqālim* (*Descriptio imperii moslemici*)], ed. M. J. de Goeje, BGA. III, Leiden : E. J. Brill, 1877], pp.1-498。
- 62) 著者の言及に基づく [*Ahsan*, p.9]。上記の de Goeje 版には, 地図が付いていないが, Berlin の Sprenger 5 (Ahlwardt6034) 写本には単色の各州の地図が残っている。
- 63) 西暦 10 世紀における「諸道と諸国の学」に属する作品の中では, この al-Muqaddasī (al-Maqdisī) の書が近年, 最もよく研究されている。A. Sprenger, *Die Post- und Reiserouten des Orients*, Leipzig, 1864 に始まる, al-Muqaddasī の研究は, Henri Lammens, al-Maqdisī wa-jughrāfiyat Sūriya fī 'l-qarn al-'āshir li 'l-mīlād, *al-Mashriq*, 10, 1907, pp.683-95 などを経て, A. Miquel, Les portes d'Alep chez Muqaddasī, *Arabica*, 7, 1960, pp.60-71; T. Lewicki, A propos d'un traité géographique d'Al-Muqaddasī, *Cahiers de civilisation médiévale, 10e-12e siècles*, 12, Poitiers : Université de Poitiers, 1969, pp.35-42; Sabāh Mahmūd Muhammad, al-Wasf al-manākhī 'inda al-Maqdisī, *Dirāsāt fī 't-turāth al-jughrāfi al-'arabī*, Baghdad : Wizārat ath-Thaqāfa wa-'l-I'lām, Dār ar-Rashīd li 'n-Nashr, 1981, pp.41-51; A. Miquel, L'organisation de l'espace dans la présentation de la Palestine par le géographe Al-Muqaddasī, IV e/ X e siècle, *Revue d'Études Palestiniennes*, 2, 1982, pp.84-96; Muhammad Mahmūd Muhammadayn, Mafhūm al-iqlīm wa-uslūb dirāsāt-hu 'inda al-Maqdisī, *Buhūth al-Mu'tamar al-jughrāfi al-Islāmī al-Awwal* (*Proceedings of the First Islamic Geographical Conference*), Riyadh : Jāmi'at al-Imām Muhammad bn Sa'ūd al-Islāmīya, 1404/1984, vol. III, pp.339-56; Akhtar Husain Siddiqi, Al-Muqaddasī's Treatment of Regional Geography, *International Journal of Islamic and Arabic Studies*, 4・2, 1987, pp.1-13; D. Sturm, The Arab geographer al-Muqaddasī: witness of popular custom in the tenth century, *The Arabist* (Budapest), 9-10, 1994, pp.37-47; D. A. Agius, Historical-linguistic reliability of Muqaddasī's information types of ships, *International Medieval Research*, 1, Turnhout : Brepols, 1997, pp.303-29 などがある。

(2002. 10. 11 受理)